

高橋たか子  
天の湖

# 天の湖

高橋たか子

新潮社版



天<sup>てん</sup>  
の  
湖<sup>みづうみ</sup>

昭和五二年二月一日発行  
昭和五三年一月三〇日三刷

定価八七〇円

著者 高橋<sup>たかはし</sup>たか子<sup>こ</sup>

発行者 佐藤<sup>さとう</sup>亮<sup>りやう</sup>一<sup>いち</sup>

発行所 株式<sup>てん</sup>新潮社

東京都新宿区矢来町七一 電話

業務部 〇三二六六五一一

編集部 〇三二六六五四一一

千一六二 振替 東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社  
製本所 神田加藤製本

© Takako Takahashi 1977 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

天

の

湖



## 第一章

「こんなに八十羽も九十羽も鳩を飼ってる人って、どういう気持でそうするんだろうな。つまり君のことだがね」

と、関勲平は言った。鳥籠に一羽や二羽や三羽なら、わかることだった。だが何十羽というのは数が多いというだけではない気がする。

「気持って？ ああ、鳩はいいよ」

と、政田宗助は言った。

「鳩はいい？ 人間ではなくて鳩はいい、ということか」

関勲平はその問を口にすべきかどうかためらった後、そう言ってしまった。

政田宗助は一瞬、こちらを凝視したが、何も答えず、空へ眼をあげた。

二月の固い真青な空に、政田宗助の飼っている鳩が飛翔しているのであった。正確には八十二

羽ということだった。さつき政田宗助が鳩舎の出口をあけると、それら全部が、一斉に飛び立ち、関敷平は自分の頭すれすれの視野に灰色の生きものがむらむらと舞く図にすこしたじとしたものだったが、鳩たちは一団になって垂直にぐんぐん昇っていった。青空に灰色の毛糸の玉がばらまかれたようになって遠ざかり、忽ち空の奥に突入していき、それらの灰色が空の青さに溶けてしまったかのように見えなくなったのを、関敷平が息を殺すふうにして感嘆していると、また上から現われてきて、あいかわらず一団になったまま、或る高さのところを旋回しはじめたのであった。

鳩の群は鳩舎のある場所を中心にして回っているようにみえる。二回、小さく回った後、次は、ずつと脇へそれていったかにみえたが、やはり大きな円を描いている。青空のなかで灰色のユニフォームを着た小人たちが体操しているような、整然としたものがある。ぐんと低空飛行してきて、鳩舎のすぐ上を通過すると、またも関敷平は一羽一羽の眼が自分の頭の間近かで舞っている図を、うっと唸って見あげた。だが群は風に乗るふうにすうと斜めに迫りあがっていき、そしてそのまま、またぐんぐん上昇しはじめた。灰色と空の青さとが釣り合う高さの境目を越えて高く高く上っていき、青空に酪酊するふうに姿が消えていく。たったいま接近した時の、ばさばさと生ぐさい羽ばたきだけが、まだ関敷平の耳許で鳴っている。

「なるほどね」

関敷平はやつと感心した声をだした。

「まあ最後まで見ててくれよ。鳩舎に帰ってくるところがまた面白いんだ。一時間はかかるけど

ね」

政田宗助は満足そうな視線で、飛行の跡を追っている。

いつも俯いている青くむくんだような政田宗助の顔しか関勲平は知らなかった。高校卒業後五年ぶりだが、関勲平はほとんど忘れていたそういう顔の政田宗助を一昨日思い出したのである。高校時代から沢山の鳩を飼っているということだったが、あの頃はどうとも思わなかったのに、一昨日ふいに政田宗助に訊ねてみたいと思ひ立つたのであった。

犬を一匹飼ってる人を見ても、ぼくは何とも思わんよ。だが、犬を八匹飼ってる人には、なぜ、と訊ねたいんだ。それほどのことをするからには、きっと何か人には言えないわけがあるんだろう、とね。

と、関勲平は口のなかで言っていた。

「君が図書館に勤めているとは知らなかったなあ」

関勲平は昨日電話をかけて、訪ねたい意を伝え、はじめてそのことを知ったのである。月曜が休館だというので今日訪ねてきた。

それにしても変わった奴だ。大学へ行かずに図書館へ就職してしまう。家には八十二羽もの鳩がいる。

と、関勲平は呟いた。

「君はもうそろそろ卒業だろ」

政田宗助は言った。自分のことを話題にされるのを嫌って、さっと相手への質問に切りかえた

というふうであった。

「いや、二回落ちたのでいま三年だ。東大をねらってたもんでね。東大はあきらめたが」

関勲平はそういう種類のことをこれまで何十人もの人に言ってきた、と思う。だがそれに続く内容は自分の喉の奥に呑みこんでしまうのが常だった。二つ年下の弟と結局いっしょに東大を受ける羽目になったので自分は私学に変えてしまった。弟はあっさり東大に合格した。

「学習院だったね」

「いや早稲田だ」

「そうだったか、君とこの宏壮な邸宅から何となくそう思いこんでしまった」

政田宗助は宏壮なという時、それを具体物で示すためか、向いの丘の枯木立の間にぼつぼつと古風な屋根の見える、いわゆる鎌倉山の旧別荘地のほうに右手をあげた。もともと関勲平の家は市の中心部に近い谷のなかにあった。

「何を研究するんだ？」

「何もないよ、そんなもの。君は変だね、研究なんて言葉を使う。勉強すらしてないよ」

「ああ思い出した、むつかしい本をよく読んでたなあ。哲学をやりたいって言ってた」

「まあ、その話はいいいよ」

今度は関勲平のほうが話題をそらした。自分のことを話すために来たのではない、相手に訊ねるために来たのである。だがその相手も自身の話題を避けるふうである。

そうか、そんなふうなところがあるからこそ、ぼくはこいつに会いに来たのかもしれない。

と、関勲平は考えた。

「そら、群から離れたのがあるだろ」

政田宗助は空を示し、二人が立っていた位置から五、六歩前にすすんで、手摺に前のめりに凭れる恰好になった。

政田宗助の家はごく最近この丘の斜面に建てられたもので、窓枠のアルミのてらてらしている真四角の鉄骨二階建てである。その屋上に鳩舎がしつらえてあるのであった。新開の住宅地であるこの丘の、土のむきだしになった斜面に、青や赤の屋根瓦をもつ同じような型の住宅がぼつぼつ建ちはじめていた。

「鳩はいいな」

関勲平は自分も手摺まで歩いていき、さっき政田宗助の言ったことを口にしてみた。

谷のなかにある自分の家とは違って、丘に建つ家の、その屋上にいるので、自分が空のなかへ突き出ているような晴れがましきである。おまけに鳩の飛翔によって、さらに高いところまで眼が持ちあげられる。澄んだ真青な空だった。雲一つないので鳩の灰色が一際くっきりしている。平面的な固い青空とみえていたものが、鳩がそこを上昇したり下降したりするので、どこまでも上に拡がっている膨大な空間と感じられ、鳩が空の奥に消えていくと、人間の視力などの太刀打ちできない彼方というものを思わせられる。

「弱いものはあして先に降りてくる」

政田宗助は腕組みをしながら、上を見て言った。

空へ投げ出された落下傘みたいなの、ぎざぎざした汚点となって、ゆるゆる降りてきている六羽があり、まもなく一羽一羽のそれぞれ勝手な羽ばたきが見えてきた。それに引きかえ、一団になったものたちは威勢のいい飛行のカーヴを青空のなかに反復している。

「君は毎日こうして見てるのか」

関勲平は鳩を見ている政田宗助の横顔を見た。

「ああ、そうだよ」

政田宗助は関勲平のほうを見ずに言った。

そりゃ、鳩はいいよ、ほくも今日見て、そう思うよ。でもなあ、君は話をしたくないか。人間と本当に話をしたいとは思わないか。

と、関勲平は口のなかで言っていた。

「鳩とは話を通じるんか」

関勲平は政田宗助の沈黙を鉄の棒みたいなので掻きまぜたい気分になる。

「飼ったことのない奴にはわからんだろうな」

政田宗助は感情的でなく言う。

「だが鳩でも犬でも、人間からの一方交通だろ。話し合うなんて出来ないものだ」

関勲平はそう断定してしまった。

「何を話し合うんだね」

政田宗助はちらっと視線をこちらに流した。

君は、昼間は図書館で書物ばかり相手にしてる。家に帰れば、八十二羽もの鳩にかかりきつてゐる。そりゃ両親も妹たちもいるにはいるだろう。だが、なにか君は変わつてゐるよ。それで過不足ないのか。過不足ないとすれば、そういう人の精神構造はどうなつてゐるんだ？ 君は人間恋しくないのか。

関勲平はそう訊ねてみたかった。だが、高校時代に同級だったというだけで、それ以後附合いもなかった政田宗助にむけて、そんな質問をするわけにはいかなかった。

「今日見てもらつてよかったよ。天気の良い時はこんな飛びかたはしないんだ。風の強い時もだめだよ。こんなに高く高く飛ぶのは今日みたいな日だけでね」

政田宗助は降りてきた六羽をむかえるふうに、屋上の右端へ歩いていった。

関勲平はそのほうを見ず、手摺にもたれて青空に向い、大声で言った。

みんなみんな人間恋しくはないのか。

もちろん自分の内部の大声である。関勲平はもっと政田宗助と話がしたかった。

一羽や二羽や三羽なら、そりゃ普通にわかるよ。でも八十二羽なんてものはね、本当は人間恋しくてたまらない人のすることじゃないのか。

などと政田宗助に訊ねれば、という答が返ってくるだろう。きっと政田宗助はひやつと冷たい気配になつてしまふだけだろう。答など返つてこないだろう。

「君、酒は飲むの？」

関勲平は話題を変えた。

「いや、やめたよ。酒はやめることにしたんだ」

政田宗助は降りてきた一羽を右手の上に乗せて、こちらを振りむいて言った。

関勲平はすこし面喰らった。自分も大学のまわりにいる連中も、いまや旺盛に飲みはじめたところなのであった。

「どうしてなんだ？」

と勢よく言いかけ、だが関勲平は気づいて語尾をだらりと垂れてしまった。

「もうそろそろ帰ってくるよ。一時間経ったからね」

政田宗助は案の定、質問を無視して、腕時計を見た。

「呼ばなくとも帰ってくるのか」

関勲平はたつたいまの質問がまだ舌の上に苦い味をのこしているのを感じながら、言った。

群をなした鳩はまだ大きな弧を描いていて、いっこう降りてくる様子でなかった。二人とも空を見あげたまま黙ってしまった。その沈黙は関勲平にとって大学での友達との間に生ずる沈黙ほど気詰りではなかった。政田宗助の気持がすこしもこちらに向っていないからなのかもしれない。関勲平も真似て、鳩舎の屋根に降りてきている鳩の一羽を、自分の手の上に乗せたいと思った。近寄っていった、大きな骨太の手で胴体を握んだ。だが片足だけが握まれてきて、鳩はひどく羽ばたいた。灰色の羽に首のところだけがなまなましい虹色をしていて、眼のなかの柿色が、怯えたせいか一段と色づいて関勲平のほうに見ひらかれている。鳩はぬるりと掌から逃げてしまい、宙を羽ばたいていって、手摺の上へ降り立った。

と見ると、飛翔していた鳩たちが、隊列をみだして鳩舎のほうへ下降してきていた。生きものの絆きが関勲平の視野を忽ちおおい、関勲平は人間とはまた違った生臭いものに包囲されているという感じを受けた。ふと、関勲平は街の雑踏のなかの、あの生臭いものとともに歩いていった時に、或る日、考えたことを思い出した。こいつらのうちのたった一人でもいい、男であろうと女であろうと、どんな人であろうと、そのたった一人と本当に愛し合うことができれば――。

「君、君、見ててくれよ」

と言つて、政田宗助は「ほーい」と奇妙に高い声をだした。

関勲平が高校時代からよく知っている、いつも俯き加減にみえる青くむくんだ政田宗助の顔から出てくるとは思えないような、フルートのような音色だった。

屋上のあちこちにすでに降りてきている鳩たちの全員が或る構えをした。そうして、一羽また一羽と鳩舎へむけて水平に飛んでいき、金網の張られている前面に突き当るふうになると、一羽また一羽と鳩舎の内部に入っていく。

「出口とは違った入口があるんだよ。アルミの扉が垂れさがっていてね、それを鳩が頭で押して入っていく仕掛けになつてゐるんだ。中から外へは開かない扉だね」

政田宗助がそう説明する間にも矢継ぎ早に鳩たちは鳩舎に突入していく。またたくまに全員納まつてしまい、鳩舎の内部がひどくにぎにぎしいものに変貌していった。二坪ほどの面積で二メートルほどの高さの空間に、命が充ち充ちているのが見てとれた。空のあれだけの広さに拡散していたものが、いま、そこに密集してしまっているのである。

「あの中は温かいんだろうな」

関勲平は言い、なぜともなく、真夜中に鳩舎のなかに蹲っている政田宗助の姿を思い浮かべてしまった。そんな時、政田宗助はどんな顔をしているのだろうか。政田宗助の一番底に納われているのかもしれない善良な顔を、関勲平は思ってみた。

「ちょっと中に入るだけで、君なら、羽毛で息が詰まるような気がするだろうよ」

政田宗助はそのことを示すつもりか、自分の毛糸のセーターにくっついていてる羽毛の一本を、摘みあげてみせた。

「なぜぼくならと言うんだい」

「君は鳩がそんなに好きじゃないだろう」

そうだな、ぼくは人間のほうが好きだなあ。

と、関勲平は言いそうになり言わないでおいた。

「君はなぜ鳩を飼ってるんだ、こんなに沢山沢山」

関勲平は今度は自然にその質問が口に出た。

政田宗助はやはり答えず、といって無視したようでもなく、うつすら奇妙に笑った。その青くむくんだ陰気な顔の内部が二重底にも三重底にもなっているように関勲平は感じた。

「あそこの桜並木ね、桜が咲くときれいだよ、おとしここに引越してきたんで、去年見たただけだ。今年もきつときれいだよ」

政田宗助はそう言ったが、四月になったらその桜を見にこいと言っているようでもなかった。

関勲平が帰ろうとすると、政田宗助はまた来いとも言わなかった。

政田宗助の家のある丘の、新開地特有の泥土の坂道を、関勲平は降りはじめた。脚が長いので、坂道では膝ががくがくする。黒っぽいズボンに鳩の羽毛が何本もくっついていて、大きなズック靴で土を強く踏みながら降りていく。

なぜ人間と話さずに鳩を飼ってられるのか。それを知りたいからこそ、関勲平は政田宗助を今日訪ねてきたのだった。たったそれだけのことを聞くためにのように、親しくもない五年前の同級生の顔が、一昨日ふいに関勲平の眼前にひらめいたのだった。

知りたい、知りたい。

と、関勲平は丘を降りながら考えた。

それにしてもさっき自分は、真夜中の鳩舎のなかで鳩たちとともに蹲っている政田宗助の善良な顔などというものをなぜ想定したのだろう。

日頃関勲平は、人間が自分の個室にたった一人でいる時の顔というものを考える。自分の個室とはいわば自分の存在そのもののようなものだ。自分の存在の輪郭が部屋の高さまでひろがったもの、それが自分の個室である。人間は誰でも一人になると忽ち狂人になる、という文句を、いつか本のなかで読んだことがあるが、その文句はツーツーと関勲平の胸に突入してきた。他人の前で抑えていた自分が、まるで腹の皮が破れて内臓があふれ出るように、部屋の高なかにあふれ出る。熱く粘っていて、收拾がつかず、掴みどころがない。そんな自分が、部屋全体を満たしてしまう。勉強机の上で、髪を掻きむしり、とろとろ煮えたぎる自分の存在と、一対一で向き合

う時、人はどんな顔をしているのだろうか。その顔を、他人は決して知ることはない。自分自身ですら、知りようがないのかもしれない。

もしかしたらみんな誰も彼も一人一人が、そんな図を自分の個室にかかえもって生きているのかもしれない。

そういう個室と個室との間に、なにか通路が考えられないのだろうか。そう関勲平が思うことについては、もう一段階先の思考があるのである。

狂人という他はない個室のなかの自分の、中枢の一点に、いままで使いものにならないでいた善良さのようなものがある。

君。

と、街の雑踏のなかでも大学の教室のなかでも、関勲平は声をかけてみたいのだ。だが誰も、関勲平の内部に埋め込まれている善良さのようなものに気づいてくれる人はない。

日射しのなかに夕方へと傾いていくきざしが感じられる。まだ三時であったが光線がすこし斜めになったせいとか、谷を歩いていて関勲平が眼をあげると、丘をおおっている枯木立の明暗がくつきりしてきていた。しらじらと屹立する裸木の林のところに、陰気に黒い杉の木立がある。下生のすすきが陽に照らしだされて、温かそうな乳色に拡がっている。

関勲平は足の向くままにふらふら歩いていったが、ふと立ち止った。囁くような女たちの歌声が聞えてきたのである。すこし前方に昔の小学校のような木造二階建ての建物が認められた。どこか異国風の印象をあたえるのは、窓が縦長で、その上部がアーチ形になり、白いペンキを塗っ